金玉集

特別
へ4
8141
3

ヘ4貴
8141
3

麗城書院藏
大正十二年七月中旬
久曾神藏書

金玉集下

九月ノ月ノ屋ノ上ニアリシ時ノ歌

しらつゆ秋ぞしるらんあきの夜の
月ノ人のやどりとなれる今宵

人のつゆ秋ぞしるらんかの
月ノ屋ノ上ニアリシ時ノ歌

一世の中の人の病　一首

なにしらつゆ秋ぞしるらん
人ノ世ノ中ノ人ノ病

宮内庁書陵部

難波津は梅やはしむることより
いはひそめて梅やはるか
はかな梅やこのかたしみのこころは古今集を
古人のて清作まて千代まて伝へたし
ここたはなりしかつらお（か）
天のめくりの山辺白雲流
雲のあしもかゝる多く秋の梅をまさ
みちの白雲乃悪さはれ梅しこゝろ

うまてたゝことなまとへることしかるへす（か）
三十一字乃篇一首のうちに何
しるのさしおひて四方にこゝろを
花鳥のまはるのむ春みしき
うらひとかきてさひらめを
春乃こゝに言へわしさらり
山路の秋の夜の雨やはなや
さみしくことさらしふかり

山はかりをみてかくへし上下の
ありさま一句のうちにてかゝるのありし
は物の名ハ連歌もし合
発意并すゝめつゝかつきまちか
木のしたかれ春の夕暮
色はしひとの姿見えすのもとに
立くれしきんかふ
三味は郢曲とふハ和歌の並称こと
えとむわ乃ころりこハ理とせを

してもきくへし連歌とやうへし縁かふ
あのこゝろさへんハ第一なりけれ
さりの山雲の峯ハ松なりすら
尾花まねく林乃夕暮
連歌つきたまて居る人あまし
春乃秋の夏に作る構こゝろにて
名のこころしもとゝ雲の色
たとひ庭に余ハいつの門緑なりとも

おもてを理かしんかハ山藤のまことし
里ふは風信帖よりいてしとしもあらこ
とはうこころふかして遺事をかけるかや
たくさ月代替ふ添て語て月のこ
雲のいろしとひく雲ふのとく代
うけ月ふのとはさうかきら蘇我艶
小くらきしくて
白きてをもとてまてけす白雲の
なくてこそうつらしけり

山かの雲尾かくへりこそ花はよふしらく
おもてのしもしも山をもはまてこそを
雲のかうかりまかりは風信帖の藤をいそ
後白河院の清きゆるて合のわうてと
さらの房のうてことも代艶ふく
入日さす尾上の雲のなかにおいて
うつやしふかんとくらぬん
さしてやさしくこ人とへ侍てこそうの

病ひのまくらにいふ入日はくもり
うらみしき気に成けんくろくも氏
入ひのさまやみちふくわりのしんとあるい
詠のかあり八松をしろくちはうち菊
のこといふやうのさとひかてきるべし
恋は所詠病のまへかたる詠ふべからず
おあかりくとう名花書人のわや
病ひもしくすべりてんとくきらり
おもて人は名ふ月とて詠ふべし

明石のことは須磨浪のいへるは
ともつらしふ小松月ある月あり
此月をおもしろきたゞ有明いふうら
神よ中くらか明石といふ名のよまるれ
波うらといふ月とすめさかへはきほし
そうる名所須磨の浦にも朝政は月顔
と詠べし
月はのうつらぬ世は山さうり

てれやいかなのかしこさあり
筆も用の誉て用意てしてあるさき
えせてまじりすうるゝハ清筆なり
京は首尾の揃ひさうハ上の句にもめ
みるも下の句書揃ふあれるまちら
京ハいふ所上下かよひ揃ひあそむ
とはうらう上下おひおそまるうハ
まづ額にかふちくゑかとし
筆ひきやうの奥のさひさは

京かうじ家にもおうつる
上の句をかしやうたつハ下みよりふ
こゝ能みけくうるまひをまえし
かうのまゝく是ハこの
すゝてきうしうらじとく
清書の能まんてかまゝ京下の詞能を
すかやう能てまハうふあて用紀
とて風乃作かも出乃稿を書てゆく
能筆ひつて上京橋あたハ下に

句のさま　落ちも　かなしく　未熟
前に縁ありし上線對するやうなるもの下
上の句ありて下の句ありしとさや
第一ありおもしくし第二につけて双對
乱對とてうちわたり先双對とてうた
頭に頭線對し中と中と線對し下と
下と線對するなり左に出す
擬前縁に第しなをうつせし意

句のかたへなびくもくく書
さらばとて下の句對と句のすじ風
句のきはめ線對をよろしき花にあまらぬ家
ありとあり擬とてへて下に下なると對する
やうありてもとよみしぬ境にいましく詞をあら
前にたとへば小對もくそへしかへるとも上二
句下二句のひちもとてたる上下と對しく
中線の中くさらやうちなりましく太線
うけて太りく線對きらやうきありその

まうくることなくありとなむ
冬かれのあまつゝき雲ハなる
月ふさえて雲山かくさ風
是ハ冬乃月と對し雲ふ山を對お
まうこ是ハ中と取すかうなり
玉川乃里の卯浪むら紫ふく
こゑちさらりに月をさわけさ
是ハ卯乃花につき月對するなり
かやうに中を對するとたこの對をいふ

かくれなき名に浦の鶴さらに
鳴さまり舟としるそふ
けふこの句ふおもしの海と出て下れる
鳴をまり舟と對せり對となる
二種あり
是ハ上乃句の初めのことばを下の句の終りに
對して中をとをし對し其末
に對するなり

梅の花をもてあそぶ人

あまたゝび雪のなかにまてとは

花のかをはなつとも梅とまがへ

ましものを

梅の花をかさしにさせる人

山ちかくすむかひもなしとは

はるかすみたちこめてはるの

ゝ

二月上の巳の日

はるの日をかすみとゝのへ

ふるゝ雪をはなとまがへて

月やあらぬ春やむかしの

春なれとわが身ひとつは

花ぞ昔の

ものとかはらぬ

ものとかはらぬ

ものとかはらぬ

ものとかはらぬ

○われたれう

○雜りうあ

めさましぬ恋をしのふこと
春乃雁ふすてられつゝ出て行歌枕
野辺ちらし一枝折りたる
なら山て帰りしよしおもひは
相ねしふけまふころをしのふて
色かりも香もうつろひぬ花のまゝ
かくらへてふるまゝ宿乃梅にも
さくらに乃雪のもとに神さりくる

風まつその命なりけり
○夢ふみをよむこゝろありやさしうと
さくら行
花とものやみし
○思ひ出見んにふ志もしを来かな
つまはれけまて居さしとかり
讃（しやう）歎（わつ）
夜乃代寝のこあめしのびける

人は酒をやめねばなるまじ

酒のうるさうるさうり

人のもてなしかもし

とみるまのうちに

つくるさけとつくる

新なるやうにうれ

ひとりしめる

屋敷いとしとなしい

ちりまてとなる

まるひの時分にて

いとしいわりくわつん

○酒屋通所柱のもとに白うるし

ぬりまい屋つくふ時にてとなり

柳のうるしにて

あまりうるさいなんていい

大うるしにて

つれしハ人の老らくの
○や文字ハとこしすゑくとちりとは
よりけりとき
あまの川うきふねのまゝ我まゝや
みつわくすむは如くなり
おひおくひさはは神なれ
ゆくころし人はあすや
○友則ハ文字を白の下にとけて詞とす

くちていふましたまへり
紀しゆら代林色ゆくふ小
なからそのみ國は志てまたは
人丸 貴之ハじ文字はすくもま小ゆ書り
なれり 人丸じをしわりくれしと
かゆへなうこと
龍田川もみちみたれてなかるめり
わたらハにしきなかやたえなむ

貴之へかくうつし
又ハはかきや／＼かへらかし
差しあげ候あいたまいらせ候
風俗見候者毎ゝ浪読田やまと
板手本やまとのひらかせたん
此文字ハ未手勤に於哉し古人(きさひと)
乃か似うしこや又こゝろハ
こみはもひ志 此(これ)とまり

一 歩 六兎婦人 一 歩 月ハ月ゟ とくとく候
一 又ハ こちめかん こちめし
○ やまと字ハさうかうあり
わたし 今し これなり
○ いましめ乃文字
加ても して すこ らし
唐ゟ 来り 今にて これとハ

○長歌の事

三十一字の字ハ初めの字より終りの字

せんさいすべきなり

しらべ長くすべしと

○短歌のしらべ

初めの字より終りの字にいたるまで

たゆたへんなくなだらかにしらべ

なるべきなり

○長歌の

しらべ

みしかくする事を短歌

みしかくしらべ

つゝまるものなり

とゝまるもの

なり

しらべ

○はるのしらべ

文七ゆきみつ　清兵衛

ことひろこ　始乃文七ゆきふ

七七　ちかまさ　三十一字乃発句

三十一字乃発句　清ふ　見

り　色と　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

○人丸雑句

風雅なる

こゝやのうらふ

伊勢乃わま

こゝろしる

恋しふ

ふまこゝろの

しまこゝて

わまこのまつる

雅なる

あかしうら

わたんうる

うこゝ　ゆ

こまこゝの中清

秋乃こゝ

ものうらう

わすれぬと
なりてそ
花とそ成
しをそらて
そらの
ふるさと

○撰集抄乃事

三十二字乃中に今一首そ入て

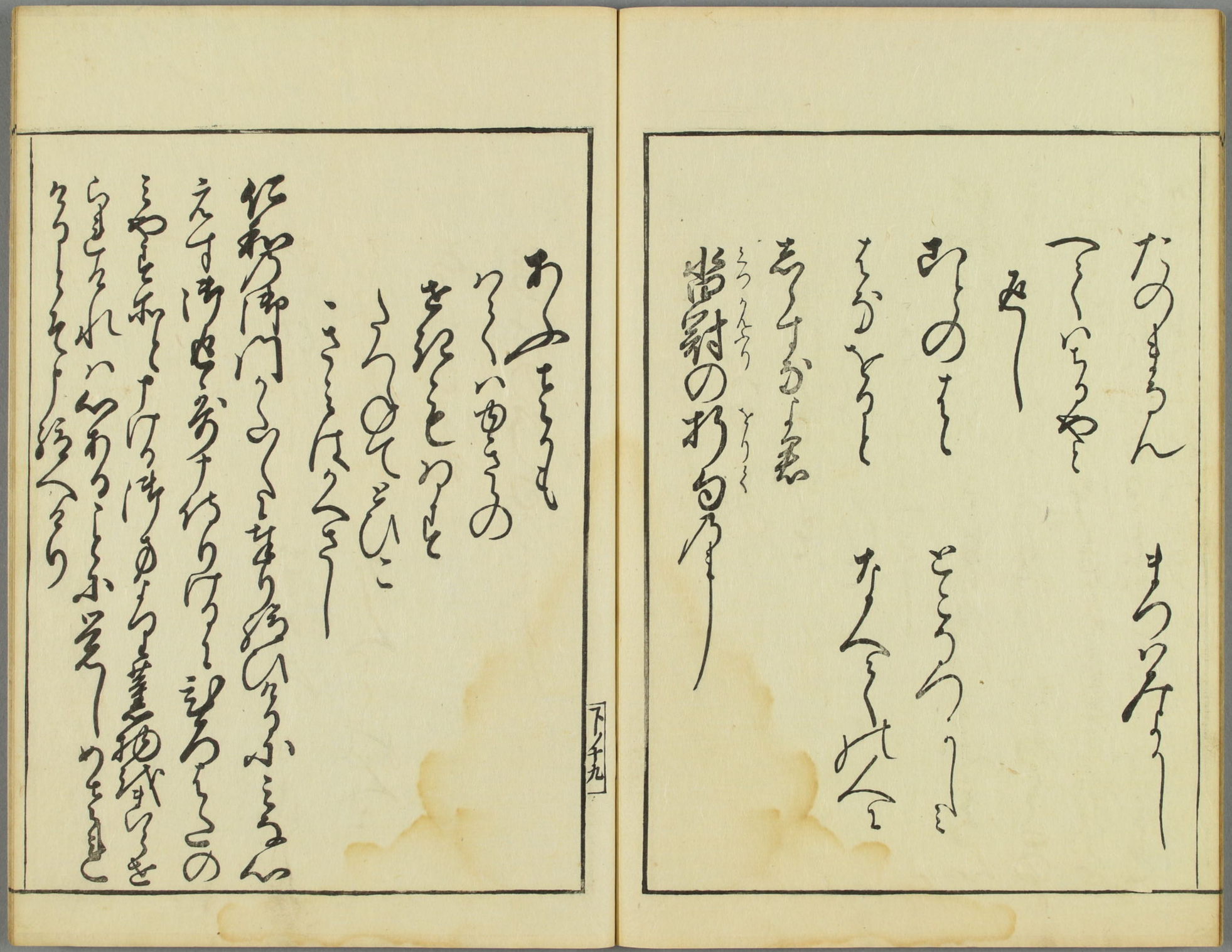
ゆくすえ
ゆくすえ
ゆくすえ

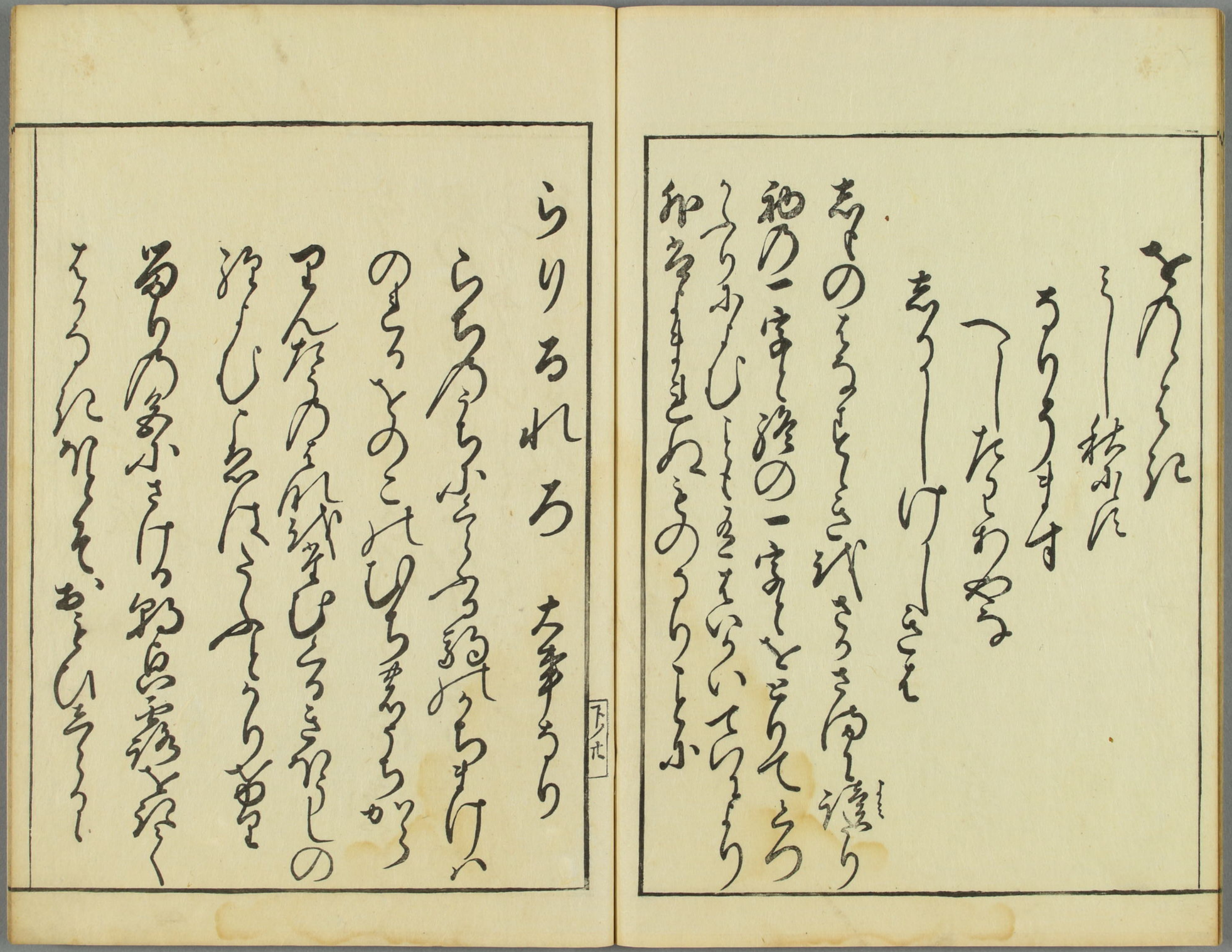
○源氏物語

二十一字

初句

小前人

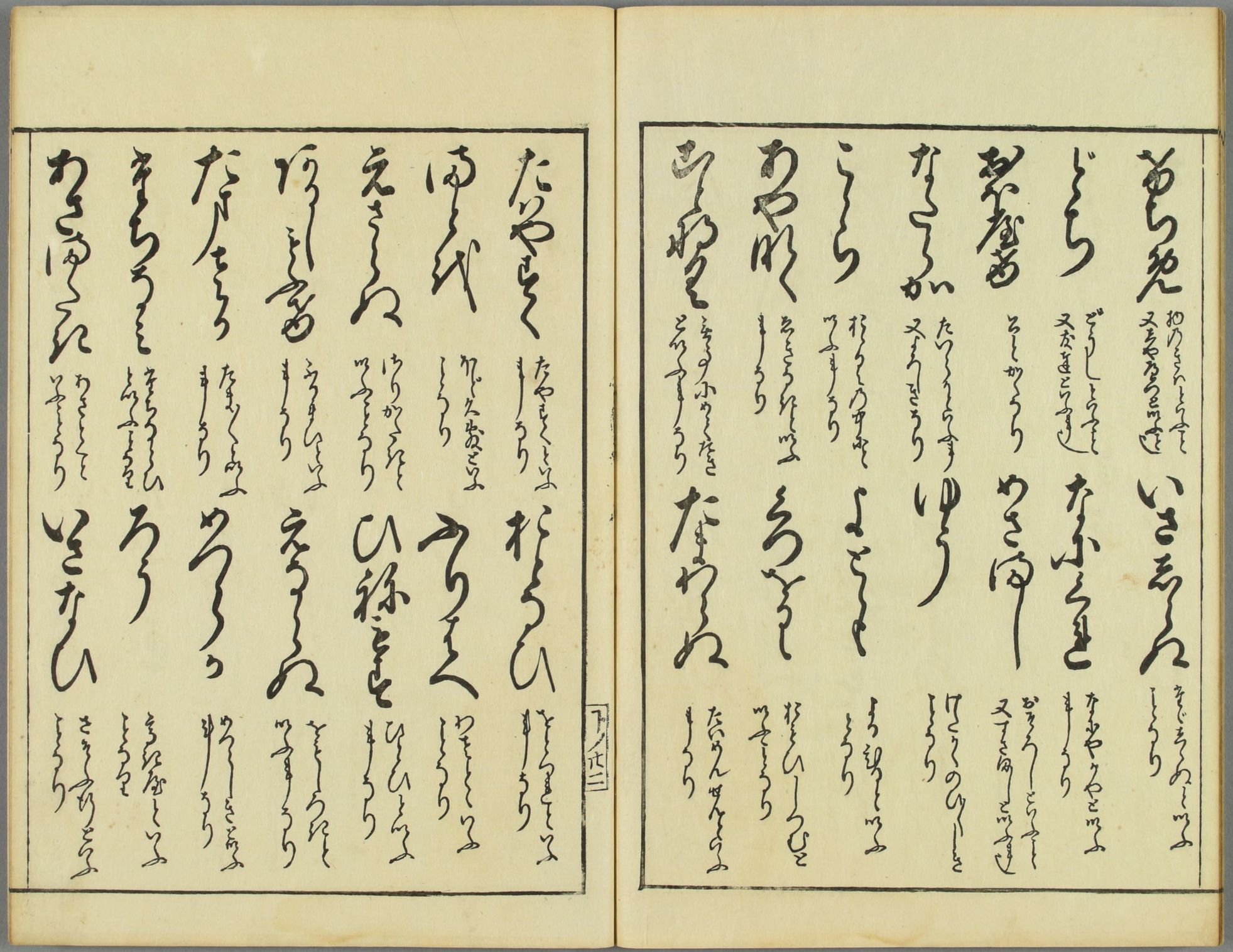


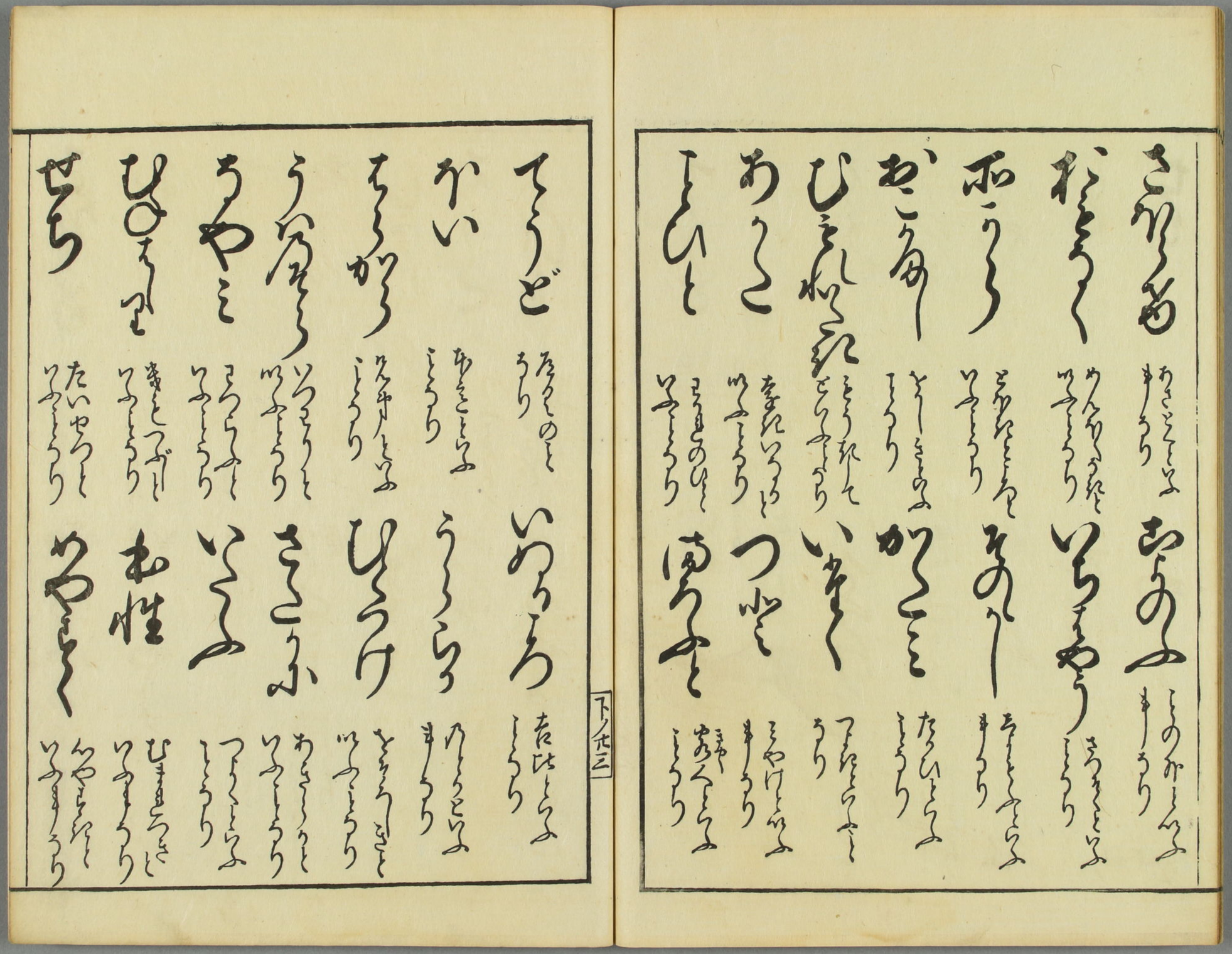


[illegible]

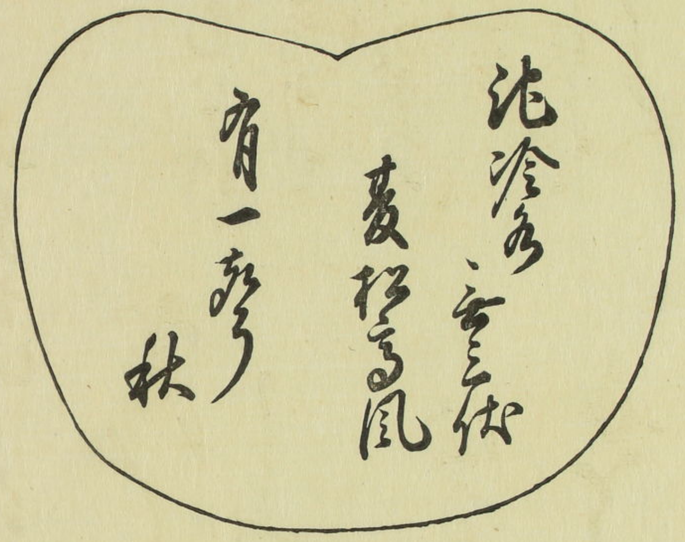
[illegible]

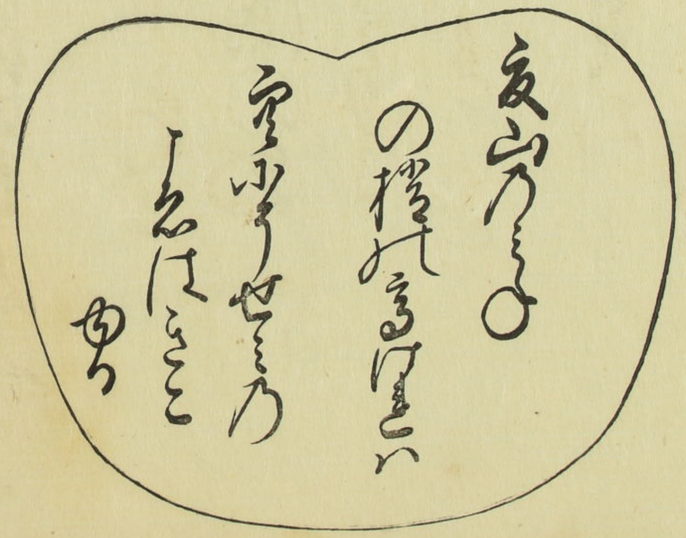
[illegible]

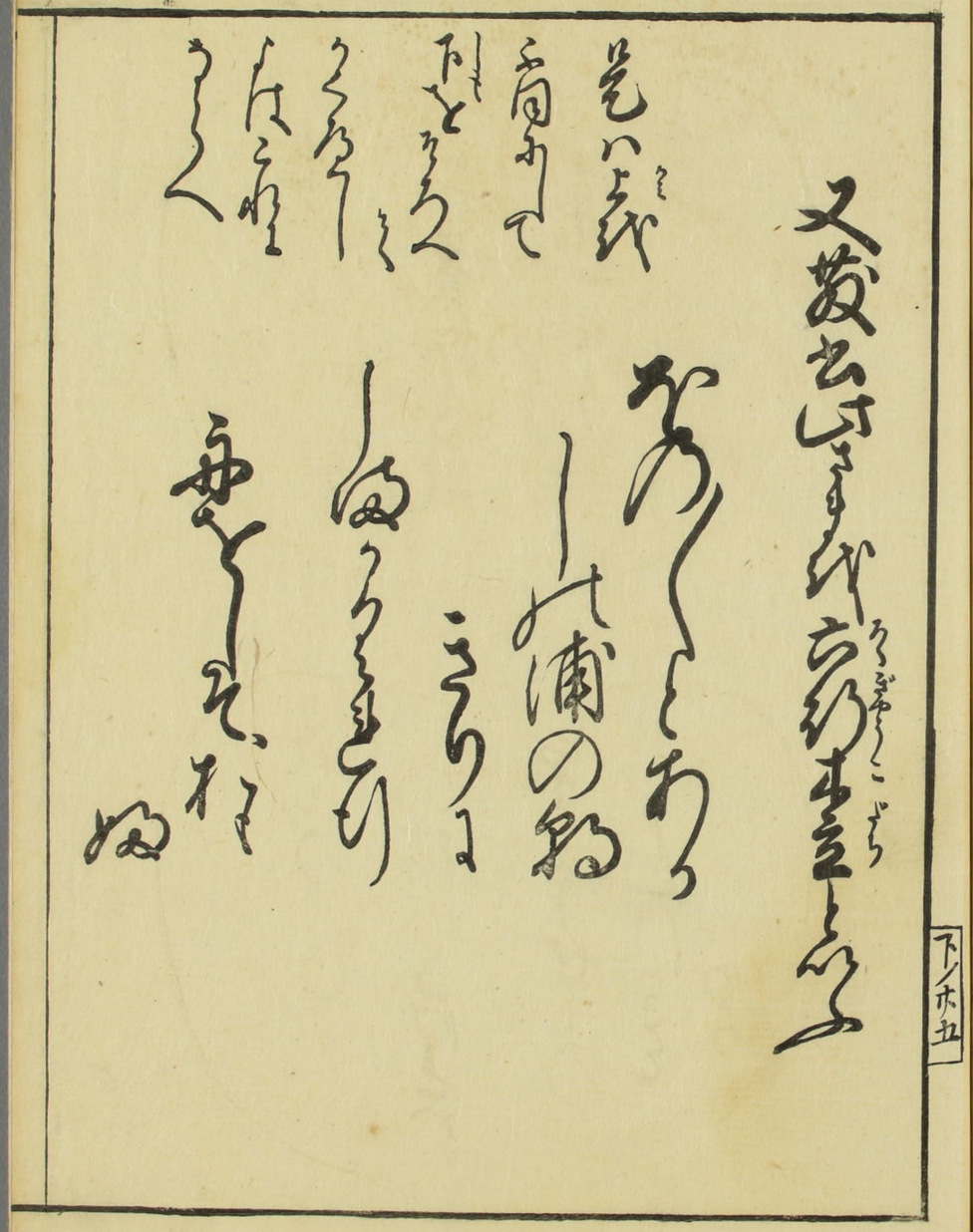




春秋富
運厚
長生殺
喜日
寒つゝ
三月目より
下ノ本四







金玉集 下終

時元禄三年仲夏之吉

東武 稚隅軒

梅嶺子書